

巣立ちプログラムに基づく1・2年次学生を対象とした キャリア教育の実践

田中徳一¹⁾・成行義文²⁾・平井松午³⁾・山野明美¹⁾

¹⁾ 就職支援センター・キャリア教育推進室, ²⁾ 大学院ソシオテクノサイエンス研究部,

³⁾ 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

1. はじめに

徳島大学では平成22年の文部科学省大学設置基準の改定に伴い、4年一貫のキャリア教育プログラム(巣立ちプログラム)を平成23年4月から実施している¹⁾。

巣立ちプログラムの目的は、学生の就業力(自らの適性・能力に合った希望する職に就き、業務を自律的に遂行し続ける力)を育成するためのキャリア教育体制を構築するとともに、就職支援体制を確立することにある。

巣立ちプログラムは表1に示すように、6科目で構成されており、1年次の「キャリアプラン入門Ⅰ・Ⅱ」の2科目は必修(各2単位)となっている。さらに2年次からの「キャリアプランⅠ・Ⅱ・Ⅲ」および「短期インターンシップ」(全て選択科目)の中から1科目以上の履修が義務付けられている。

平成23年4月から始まった「巣立ちプログラム」も2年目に入り、平成24年度は1年次科目に加えて新たに2年生を対象とした「キャリアプランⅠ」(前期)と「キャリアプランⅡ」(後期)が開講されている。

ここでは昨年度後期開講の「キャリアプラン入門Ⅱ」(1年生対象)および今年度前期開講の「キャリアプランⅠ」(2年生対象)の実施状況を報告するとともに、アンケート結果・ポートフォリオ授業コメントの分析により浮かび上がった今後の課題について述べる。

表1 巣立ちプログラム

学年	学期	科目名	内 容	単位数
1年	前期	キャリアプラン入門Ⅰ	大学生生活と人生設計 職業と人生	必修2単位
	後期	キャリアプラン入門Ⅱ	立ち位置確認と適性 把握	必修2単位
2年	前期	キャリアプランⅠ	職業意識の形成と基本 技能の習得	選択1単位
	後期	キャリアプランⅡ	就職活動の意味と方法	選択1単位
3年	前期	短期インターンシップ	短期学外実習	選択2単位
	後期		(就職活動の実践)	
4年	前期			
	後期	キャリアプランⅢ	就活総括、後輩への 伝承	選択1単位

2. キャリアプラン入門Ⅱ (H23年度: 1年次後期)

①実施状況 (表2参照)

【総合科学部】授業前半(1回~7回)では適性把握演習にもとづき、適性を能力・性格などの総合的な観点から診断して、自らのキャリアプランを作成するとともに、コンピテンシーの意義・考え方について学び、各自が選定したコンピテンシー項目をポートフォリオへ入力し、自己診断評価に利用している。授業後半は小クラスに分かれ、個別のゼミナールが実施されている。

【工学部】まず様々な業種・職種を学ぶ。次いで各自の適性・基礎学力演習を通して現時点における自らの能力を把握するとともに、キャリアプランならびにライフプランに対する基本的な視点を学び、自らのキャリアプランを作成している。また授業終盤では企業の戦略・実力をより実践的に読み取る力を養うために、経済新聞を教材として「経済新聞の読み方」から「新聞から会社の実力を知る」、さらには「新聞から会社の戦略を知る」へと授業を展開している。この授業から、ビジネス形態には消費者と関わる「BtoC」だけでなく企業を相手にしたビジネス活動「BtoB」があり、多くの優良企業がモノづくりを支えていることなどを学ぶ。

表2 キャリアプラン入門Ⅱ授業内容(H23年度後期)

回	総合科学部	工学部
1	授業ガイダンス	授業ガイダンス
2	適性把握演習(テスト実施)	さまざまな職種・業種
3	キャリアプラン・ライフプラン	コンピテンシーの意義と考え方
4	キャリアプラン体験講座①	ポートフォリオのコンピテンシー設定
5	キャリアプラン体験講座②	敵性・基礎学力把握演習①
6	適性把握演習(テスト解説)	敵性・基礎学力把握演習②
7	コンピテンシーの意義と考え方	敵性・基礎学力把握演習③
8	学科別の基礎学力養成講座	敵性・基礎学力把握演習④
9	学科別の基礎学力養成講座	キャリアプラン・ライフプラン
10	学科別の基礎学力養成講座	キャリアプラン体験講座①
11	学科別の基礎学力養成講座	キャリアプラン体験講座②
12	学科別の基礎学力養成講座	経済新聞の読み方
13	学科別の基礎学力養成講座	新聞から会社の実力を知る
14	学科別の基礎学力養成講座	新聞から会社の戦略を知る
15	学科別の基礎学力養成講座	総括授業

表3 授業評価アンケート結果(H23年度開講分)

No.	質問内容(抜粋)	キャリアプラン入門Ⅰ			キャリアプラン入門Ⅱ		
		回答者数(594名)			回答者数(531名)		
		はい (%)	どちらとも 言えない (%)	いいえ (%)	はい (%)	どちらとも 言えない (%)	いいえ (%)
A-1	本授業はあなたの進路を考える上で役に立ちましたか?	55.9	30.1	14.0	75.1	17.0	7.9
A-2	本授業で将来の職業・就職に対する不安は小さくなりましたか?	26.1	34.0	39.9	26.9	32.1	41.0
A-3	Webポートフォリオは使いやすかったですか?	34.4	31.2	31.2	38.7	35.7	25.6
A-4	キャリアプラン入門Ⅰ受講時よりキャリアデザイン・社会人基礎力に対する関心は高まりましたか?				73.8	18.3	7.9

②授業評価 (表3参照)

表3よりキャリアプラン入門Ⅰから同Ⅱへの授業進行に伴い、75%が将来の進路を考える上で役に立ったと答えており、またキャリアデザインや社会人基礎力への関心も高まっていることが分かる(表中A-1, A-4参照)。一方、将来の進路・就職に対する不安は解消されておらず、適切な情報提供とともに不安を解消する工夫がこれからの授業には必要である(表中A-2参照)。

3. キャリアプランⅠ (H24年度: 2年次前期)

①実施状況 (表4参照)

キャリアプラン入門Ⅰ・Ⅱは、大学を取り巻く今日の社会環境および将来の職業について考える上で必要な素養と基礎能力を養うという目的に沿って、総合科学部と工学部でそれぞれ独自に授業が行われてきた。

一方、2年次以降の科目は両学部とも共通の内容であり基本的に合同クラスでの授業である。なお、本年度のキャリアプランⅠの授業は履修希望者数並びに各学科の時間割を勘案し、結果的に「総合科学部と工学部の合同クラス」と、「工学部光応用工学科と生物工学科を主な対象とするクラス」の2クラスで実施した。

キャリアプランⅠは表4に示すように就職環境の知識習得、県内企業の協力によるジョブリサーチ講座、あるいは日本語力、コミュニケーション力ならびにプレゼンテーション力等を向上させるための演習など、就業力をつけキャリアデザインをより具体化させるための内容となっている。また、大人数クラスを対象とした課題解決型授業(PBL)の試みとして、経済新聞を使いグループ別に課題となるテーマに沿ったスクラップを整理し、パワーポイントを作成するとともに全員の前でプレゼンテーションを行う授業を実施した。

表4 キャリアプランⅠ授業内容

回	授業内容
1	授業ガイダンス
2	就職環境の変化と情報収集
3	企業に求められる人材とは
4	経済新聞を用いた資料収集・分析方
5	ブログ分析・解説&ジェネリックスキル
6	ジョブリサーチ講座(1)
7	ジョブリサーチ講座(2)
8	発表資料、進捗確認・指導
9	ジョブリサーチ講座(3)
10	日本語力(エントリースシート)演習
11	コミュニケーション演習
12	発表用資料整理・分析まとめ
13	プレゼンテーション演習(1)・発表
14	プレゼンテーション演習(2)・発表
15	プレゼン(3)・発表 総括授業

表5 授業評価アンケート結果(キャリアプランⅠ)

質問内容	能力・体験	総合科学部(%)	工学部(%)
		回答者数(91名)	回答者数(171名)
A. 本授業を通して向上したと思われる能力	①企業・就職情報収集能力	16.4	22.5
	②ジョブリサーチ講座による業界動向、求められる人物像の把握力	40.0	34.0
	③コミュニケーション能力	17.2	15.7
	④情報収集・分析能力、プレゼンテーション能力	26.4	27.8
B. 将来に向けて役に立ったと思われる授業体験	企業に求められる人材、就職環境の変化と情報収集	27.2	28.9
	ジョブリサーチ講座による業界動向、求められる人物像の把握	25.3	29.5
	コミュニケーション・エントリースシート	24.0	20.3
	経済新聞を用いた情報収集演習、取りまとめ、プレゼンテーション	23.5	21.3

②授業評価 (表5参照)

キャリアプランⅠでは表5に示すA①~④の能力向上を目指している。ここではこれらの「A. 授業を通して向上したと思われる能力」に加えて、「B. 将来に向けて役立った授業体験」についてのアンケート調査を行った。表5より学生は、企業の人事・総務担当者によるジョブリサーチ講座から、企業動向・求められる人物像などを把握する能力が身に付いたと感じていることが分かる。また「将来に向けて役に立った授業体験」としては、いずれの授業体験も等しく役立っているという評価を得た。

4. おわりに

ここでは授業内容と学生による授業評価結果の概要について報告した。詳細はカンファレンス当日にポスターにて発表する予定である。

参考文献

1) 徳島大学: 大学教育研究ジャーナル第9号「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラムとそれに基づく初年次キャリア教育の実践」報告, 141-151, 2012